
ヒナアフター

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナアフター

【Zコード】

N7919D

【作者名】

桂ヒナギク

【あらすじ】

ハヤテとヒナギクの間に生まれた不良娘の綾崎心。彼女は自分が通つてる潮見高校で男子生徒に恋人と奴隸の座を懸けた挑戦状を叩き付けられ、受ける事にするが・・・。

第0-1話・座を懸けた挑戦状（前書き）

この物語は、「僕がヒナギクさんでヒナギクさんが僕で」の続編に当たります。心を主人公に物語が進行して行きます。最後までお楽しみ下さい。

第01話：座を懸けた挑戦状

ハヤテとヒナギクの間に子どもが生まれて十数年。

その子どもも、綾崎あやさき 心も大きくなつた。

髪は水色で顔がヒナギクそつくりである。例えて言つなら、髪を水色に染めた高校生時代のヒナギクだ。

その彼女は今、潮見高校に通つていて。

当初、ヒナギクは心を白皇学院に通わせるつもりだつたが、金銭的な問題と本人の強い希望により潮見に通わせる事にした。と言うのは立前で、本当は心が手の施しようが無いまでに荒れてしまつた不良の為、白皇は受け入れてくれず、仕方なくハヤテが通つていた潮見に入学させたのである。

ある日のお昼休み。潮見高校の校門を一人の女子生徒が、閉まつていた門を破壊して通過した。

髪は水色。背中に正宗を背負つていて。

この女子生徒の名前が綾崎あやさき 心である事は、最早言つまでも無い。

「綾崎さん、おはよう御座います」

と、校庭で遊んでいた数人の男子生徒が心の下に集まつて来て頭を下げた。

「失せろ」

心がそう言つて睨み付けると、男子生徒たちは慌ててその場を離れて行つた。

と思いきや、一人だけそこに残つた。

「あの、綾崎さん」

そいつは怯えながら声を掛けた。

その様子を離れた所で見ている先程の奴らは「何やつてるんだあいつ？」と首を傾げる。

心は目の前で震えてる男子生徒に「邪魔だ」と言つて無理矢理横に退かして進む。

しかし男子生徒が直ぐに腕を掴んで引き留めた。

「何だよ？」

心は呆れ顔で振り向き訊ねる。

「僕と、付き合つて下さい！」

男子生徒は腕を放すとさつさつと頭を下げた。

「はあ？」

「僕、始めて綾崎さんを見た時から、ずっと好きでした！ 綾崎さんが良ければ、僕と付き合つて下さい…」

ガスン！

心は男子生徒をぶん殴つた。

「うわっ…」

男子生徒は尻餅を着く。

「いきなり何するんですか！？」

その言葉に心は肩を竦める。

「私はな、強い奴にしか興味は無いんだ。諦める。じゃあな

心はそう言つて踵を返すと、昇降口に向かつて歩き出す。

その背後で男子生徒が立ち上がって「待つて下さい！」と叫ぶ。

「ああ？」

心は振り向いて睨む。

「ほ、放課後、剣道部の部室で待つてます！」

「剣道？ お前、剣道で私に勝つて彼女しようつてのか？ 悪いが辞めとけ。お前じゃ勝てない」

「そんなのやつてみなきや分かんないじゃありませんか！」

「そうだな。解つた。放課後、その勝負受けよう。但し、私が勝つたらお前は奴隸な」

心はそう言つて去つて行つた。

すると、男子生徒の下に先程の奴らがやつて來た。

「お前、良いのかよ？ 敗けたら奴隸だぞ」

「自信あるから大丈夫。何たって僕は剣道部の部長だから」
てな訳で、時間を飛ばして放課後の剣道部部室。

心は竹刀を持つて、竹刀を持った男子生徒と対峙していた。

「勝負の前にお前の名を訊いておこう」

「僕？」 東宮あさまみや 正太郎です」

（東宮？ 何か何処かで聞いた事あるような……。まあ良いか）

「よし、それじゃあ始めようか」

「ハンデをあげます。そちらから掛かって来て下さい」

言つて正太郎は満面の笑みを浮かべる。

「自信過剰だな。それが命取りにならない事を願つて」

言つて心は駆け、正太郎の面を狙つた。

しかし竹刀は、正太郎の体を透過し、同時に正太郎の姿が消えて
背後に現れた。

（残像拳だと！？）

説明しよう。残像拳とは、目にも留まらぬ速度で移動し、相手に
残像を見せて恰かもそこに存在するかの様に感じさせる回避技である。

「貰つたあ！」

正太郎が竹刀を振り降ろした。しかし、心が前転してそれを回避
した。

それと同時に正太郎が飛び上がる。

「何！？」

心は慌てて体勢を立て直し、面をガードした。
カツ！

両者の竹刀がぶつかり合つ。

「なかなかやりますね」

「身分の座が関わつてるからな。敗ける訳にはいかない」

両者は飛び退き、間合いを取つた。

（相手は残像拳が使える。さて、どうしたものか）

そう思つて何気無く横に目を配る。

すると壁に立て掛けられた正宗がオーラを放っていた。

「東富とか言つたな。これから私は本気で行く。本気の私に勝てるかな?」

言つて心は竹刀を投げ捨て、壁に立て掛けられた正宗を引き寄せて掴んだ。

「木刀に変えたからつて、形勢は変わりませんよ?」

「そいつはどうかな?」

そう言つて心は正太郎の視界から一瞬で消失し、頭上に現れた。

「上ですか?」

正太郎が飛び退くと、そこに心が着地した。

「隙あり!」

正太郎が体勢を立て直そうとしている心の胸を取つた。

「なつ!?」

心は正宗を落とし、床に膝と手を着いた。

(この私が、正々堂々と勝負して敗けた!?)

「僕の勝ちですね。約束ですよ、綾崎さん?」

「ああ。女に一言は無い」

心はそう言つて立ち上がると、正太郎に握手を求めた。

「楽しかった」

「僕も楽しかったですよ。またやりましょう!」

と正太郎が心の手を掴んだ。握手成立。

すると回りから歓声が上がった。

「何だこの騒ぎは?」

「これは皆が僕の為に祝つてるんですよ。僕が綾崎さんに勝つて、綾崎さんが僕の彼女になつたから」

(はつ! 忘れてた! 私、こいつとそんな約束してたんだ!)

「東富、もう一戦しろ」

「駄目ですよ。約束は守らなきや」

「くつ……」

心は言葉に詰まつた。

第01話・座を懸けた挑戦状（後書き）

第1話はどうでしたか？心の今後、が気になりますね。

第02話・悪い事もあれば良い事もある

正太郎との勝負に敗けた心は、正太郎と仲良く手を繋いで歩いていた。

端から見ればバカップルそのもの。とても恥ずかしい絵だ。

「ねえ、綾崎さん」

正太郎が心に顔を向けて言う。

「何處か寄つて行きません?」

「否、悪いが真っ直ぐ帰る。バイトがあるんだ」

「そうですか」

十字路に差し掛かり、正太郎が別れを告げる。

「では、僕はこっちなので。短い時間でしたけど、楽しかったです」
正太郎はそう言つと心の手を放して右に曲がつて行つた。

心は真っ直ぐ行き、アパートを目指す。

アパートに着くと、心は階段を上つて2階に上がり、
「綾崎」と書かれた部屋のドアを開けて中に入る。

「ただいつ！？」

玄関には母のヒナギクが腕を組んで立っていた。

「心、正宗を返しなさい」

「嫌だ」

断ると、ヒナギクが紫色のオーラを放ち、目を赤く光らせた。

「まあ落ち着」

「黙れ！」

心が言い掛けた所で、ヒナギクが搔き済すように言つ。

「何だよ？」

「もう一度訊くわ。正宗を返すの！？返さないの！？」

「返さないね。正宗は私を気に入つてゐる。何なら、正宗に決めて貰おうか

心はそう言つと靴を脱ぎ、ヒナギクを避けてリビングに入り、正

宗を中心置いた。

「正宗は私とお袋、どっちが良い？」

すると正宗は勝手に動きだし、ヒナギクの下に飛んでいく。

「やっぱ私の所じゃない」

ヒナギクが言つて正宗を掴もうとするが、正宗はそれを避けて心の下に行き、心の手に収まる。

「どうやら正宗自信も私が好きらしいだわ」

その言葉にヒナギクはショックを受け、ドーンと効果音を出しながら、床に手と膝を着いた。

「正宗は、正宗は私なんかより心が良いのねー？　この浮氣者ー。」

正宗が焦り、ヒナギクの下に移動する。

「ふんだ。あんたなんか知らない！」

ガーン！

正宗はショックを受けて暗くなつた。

「案ずるな。正宗には私が居る」

心が言つと正宗はパツと明るくなり、元気よく飛んでいく。

「そう言つ訳だから正宗は貰う」

心はそのまま言つと、私服に着替えてバイトに向かつた。

どんぐり喫茶。

此処は心のバイト先である。

「ちーっす」

心が中に入ると、マスターの加賀かが 北斗が顔を見せた。

「今日も宜しく頼むわね」

北斗はそう言つと、店を出て行かざる。

「マスター、何処行くんだ？」

心の問いか北斗は振り向き答える。

「買ひ出し」

「気を付けるよ」

と心は北斗を見送る。

その直後、客が来店した。

客は適当な所に座り、メニューを開いた。

同時に心は水を用意した。

「いらっしゃいませ。」注文が決まりましたら、ビルを申し付け下
れ。」「

言つて一ヶ口一笑う心。

すると客が心のケツを触つてきた。

「お嬢ちゃん、可愛いね。名前何て言つの？」

心は顔が引き攣る。

（我慢我慢。此処で追い返したら、店の信用問題に関わる。もしか
んな事になつたら当然、私は減給だ。）

心は怒りを殺し、笑みを保つたまま言つ。

「お客様、そう言つて行為はお辞め頂きたいのですが

「ああ！？」

客が心を睨むと同時に、心の額に青筋が浮かぶ。

「何か文句あんのかコルア！？」

心は拳を作り、力強く握る。

（駄目だ！ 我慢だ、我慢するんだ心！）

しかし、心の怒りはついに限界を超えて、爆発した。

「てめえ、黙つてりや良い気んなりやがつて。じばくコルア！？」

心はそう言つて客を睨む。

「何だお前？ 客に暴力振るうつてか。そんな事して良いとおもつ？」

そこまで言い掛けた所で、心の拳が客の顔面にガスンッと埋め
つた。

客は心にビビり、慌てて逃げて行つた。

それと入れ代わりに、買い物袋を提げた北斗が店に入つてくる。

「心ちゃん、今の客どうしたの？」

「すまん。また殴つた」

そう言つて心は頭を下げる。

「そうかい。心ちゃん、君はクビね」

「そうですか、クビですか。って、クビ！？」

「ええ。だって君、いつも客追い返してんじやん」

「否、あれは向こうが私の尻を触るから」

「言い訳は良いわ。兎に角そういう事は店の信用問題に関わる事なの。だからもう君には辞めて貰つわ。給料も出ないよ」

「そんなー」

心は肩を竦めた。

「解つたらさつさと出てつて頂戴」と、北斗が心を店外に追い出す。

「ちょつ、マスター！」

しかし返事は無かつた。
心は俯き、店を離れた。

「はあ」

と溜め息。

（最悪だ。減給じゃなくてクビだつてよ。あーあ、最悪だ）

そんな事を思いながら歩いていると、掲示板に広告があるのに気が付いた。

それは三千院家の執事募集の広告だった。

心はその広告を読んだ。

『三千院家では執事を募集しています。男女は問いません。ご希望の方は三千院家お屋敷まで尋ねて下さい。月給は住み込み、アルバイト共に326・675円！ 希望者待つてます！ b y・ナギ』

「何これ！ 待遇よくね！？」

次のバイトこれにしよう！ 心はそつ決めると、早速三千院家に向かった。

心は三千院家の前に居た。

「よし！」

門を開けて敷地内に入る。

すると警報が作動し、S.P.の軍勢がやつて来て心を囲んだ。

「何だ君は！？」

サングラスを掛け、黒服を着たがつしりとした体型の髪を生やした男が心に訊ねた。

「あんたら何者？」

「我々は三千院家を守るS.P.部隊だ！ お嬢様に危害を加える族は誰である！と許さん！ 成敗してくれる！」

「案ずるな。私は危害を加えに来た訳では無い。アルバイトの募集広告を見て申し込みに来たんだ」

「やがてでしたか。では我々が屋敷まで案内しましょう。この敷地はとても広いですから、初めての方はよく迷子になるんですよ」

がつしりした男がそう言つと、屋根が開いた赤い車が現れた。

「これにお乗り下さい。屋敷まで私がお連れしますよ」と運転席に座つてハンドルを握つてる女性がそう言つた。

推定、三十路前後。

「これはこれはマリアさん。いつも『J吉^{ヨシ}勞^{ラウ}様』です」

とS.P.の方たちが頭を下げた。

「んー……」

心はマリアの顔を見て唸り出した。

疑問符を浮かべるマリア。

「おばさん、今いくつ？」

ピキッ！

マリアの額に青筋が立つた。

「私は未だ19歳です！ おばさんじゃありません！」

するとSPの方たちが何か言いたげな顔をした。

大方、サバ読んでるよ、とでも言いたいのだ。

「何ですか、あなたたち？」

マリアがSPの方たちを睨んだ。

SPは「何でもありません」と言つと、慌てて持ち場に戻つた。心は助手席に回つて乗り込んだ。

マリアはそれを確認すると、アクセルを踏んで車を出し、屋敷を指した。

「あの、マリアさんでしたよね。この屋敷には長いんですか？」

「ええ。十数年くらい居ますわ」

「先刻19歳つて言つてたけど、計算合いませんよね、それじゃ」
訊ねるとマリアは居眠りをした。

「運転中に寝るなよ！？」

「あ、すみません。居眠りしてしまいました。それで、何の話しどしたつけ？」

「否、もう良いです」

「この時、心は思つた。この人に年齢の話しあはタブーだ、と。

「そうですか。そう言えば、未だ名前を訊いてませんでしたね。何て言つんですか？」

「綾崎 心。心と呼んで下さい」

「え？ 今、綾崎と仰いました？」

「仰いましたよ」

「お母さんの名前、綾崎 離菊さんでは？」

「知つてゐるんですか？」

「ヒナギクさんは、15年くらい前に此処で働いてた執事くんの奥さんなんです」

「パパが働いてたんですか？」

「そう言えば、あの子がお嬢様から借りた15・6804・000円はどうなつたのかしら？ 未だ返し切れてないと思つたんですが

……」

(パパ、何でそんなの借りたんだよ?)

「着きましたよ」

マリアがそう言って車を停める。

二人は車を降りて屋敷の中に入った。

「執事長の部屋に案内します。付いて来て下さー」

とマリアが心を執事長室に案内する。

「クラウスさん、面接の方がお見えになりました」

マリアが言うと、白髪で眼鏡を掛けたお年寄りが答える。

「どうか。マリア、ご苦労だつた」

心はクラウスと呼ばれるお年寄りの前に立つた。

するとクラウスが目をハート型にし机を飛び越えて心に抱き付いた。

どうやら、クラウスは心に惚れてしまつた様である。

「何なんですかこの人?」

「執事長のクラウスさんです。悪い人ではないので、多少の行いは許してあげて下さいね」

心はその言葉に「はあ」と素つ氣無い返事をした。

「クラウス倉臼 征史郎と申します。お嬢さんのお名前、教えて頂けませんか?」

か?

「あ、綾崎 心です」

「ん、綾崎?」

「クラウスさん、その娘はハヤテくんの娘さんなんですよ」

「それは本当か!?」

クラウスは驚いて心の顔を改める。

「む、これは?」

クラウスが心の胸元にある飛行石に気付いた。

「ああ、これはパパの形見なんです」

「どうやらマリアの言つことは本当らしいな」

「クラウスさん、私の言葉を信じてなかつたんですか?」

「否、そう言つ訳じやないが……。所で、執事の面接だつたな。心

くん、君が現在通つてゐる学校名を教えて貰おつか

「潮見高校です」

「ならん！ならんぞそれは！今直ぐ白皇学院に転校するのだ！それが我が三千院家執事になる為の第一条件だ！」

とクラウスは格好良く心を指差した。

「と言う事で一応仮採用だ」

ズザー！

心とマリアは転んで床を滑つた。

「さて心くん。早速今日から働いて貰つ事になるのだが、先ずはこれに着替えてくれたまえ」

クラウスはそう言って筆箋タスから執事服を取り出した。

心はそれを受け取り、マリアと共に部屋を出た。

「私の部屋で着替えて頂きましようか」

マリアはそう言って心を自室に案内した。

「此処が私の部屋ですよ」

とマリアが部屋のドアを開けた。

「え、マリアさんこんな広い所に一人で居るの！？寂しくない！？」

「別に寂しくありませんよ」

「はあ」

二人は部屋に入った。

心は鏡の前に移動し、着替えを始めた。

と此処で毎度お馴染、自主規制君が現れてく見せられないよ」と心の全身を隠した。

そして執事服に着替え終わると、自主規制君は何処かに行つてしまつた。

「どうですか、マリアさん？」

と心が一回転して訊ねる。

「とても似合つてますわよ」

「ホントに？」

「ええ。それでは、クラウスさんの所に行きましょ。」
「マリアはそう言つて、二人一緒にクラウスの下に戻つた。
「では心くん、ナギお嬢様の所に挨拶に行つてきて下さい」
「解りました」

心はマリアと共に部屋を出た。

「お嬢様の所に案内しますね」

言つてマリアは心をナギの部屋に案内した。

「ナギ、新しい執事がお見えになりましたよ」

マリアがそう言つと、金髪ツインテールの一十歳前後の女性が現
れた。

「三千院 凪だ。つて、ヒナギクじゃないか。髪染めたのか?」

「心です」

「心?」

「あ、この娘はハヤテくんの娘さんですよ」

「何!?」

ナギは驚いて飛び退いた。

「ハヤテに娘が居たのか! と言つ事は、此奴はヒナギクの娘でも
あるのだな!?」

(何なんだ此奴?)

心はそう思いながらマリアを見た。

マリアはそれに目で答える。

「」の娘は三千院家の主で一十歳になつたと言つての仕事にも就い
ていな引け籠りです」
心もそれに目で返す。

「一トつて奴か?」

「そうですね。何でも、働いたら負け、と思つてるみたいですよ
「何に負けんだよ?」

「さあ」

とマリアは肩を竦めた。

「それじゃあ、次は屋敷内を案内しましょうか

マリアはそう言つと、ナギに会釈して心と部屋を出た。

するとホワイトタイガーが現れた。

「うわっ、何でこんな所に虎が！？」

心は驚いて飛び退いた。

「ああ、それはホワイトタイガーネコと言つ種類の猫で、虎ではありますよ」

「否、これどう見ても虎ですよ！？ 確かに虎もネコ科ですけど、

猫がこんなでかい筈がありません！」

心がそう否定すると、虎が鳴いた。

「ニヤー」

.....。

沈黙が場を支配した。

「って、虎がそんな鳴き方するかよ！？」

「ネコ科だからするのでは？」

「ニヤー」

虎がそう鳴いて心の匂いを嗅ぐ。

「タマって言つんです。可愛がつてあげて下さいね」

マリアはそう言つと去つて行った。

「えつ、一寸！？ 案内は！？」

しかし、マリアの耳にはもう届かない。

「はあ」

心は溜め息を吐いてタマを見る。

（これどう見ても虎だよな？）

「お座り」

心が何と無べやう言つと、タマがお座りをした。

「お手」

お手をするタマ。

（凄え！ 此奴利口だ！）

他にもやつてみよう やつ思つて無理難題を押し付けてみる。

「タマ、二回回つてワンと鳴け

(つて、虎が出来る訳無いか)
そう思つてゐると、タマが三回回つて「ワン」を見事にせつてのけた。

(やべー)

タマは慌てて口を塞いだ。

「お前、今ワソつて言わなかつたか？」

その間にタマは慌てて首を左右に振る。

「三回回つてワン」

タマは三回回つて「ワン」と鳴いた。鳴いてしまつた。

(やべえ。バレたかも)

とタマは後退りを始める。

「お前、利口だな。こんなに利口だとひょっとして喋れんぢゃないか？ 誰にも言わんから何か喋つてみろ」

心はそう言つて聞合ひを詰めた。

「本当に喋らないか？」

タマは思わずそのまま口にした。

「ああ、しゃべ……つて、マジで喋りやがつた此奴！」

「何だ、虎が喋つちゃ悪いのか？」

「悪いよ。てかそもそも虎の声帶じりや喋れんだ。何で喋れんだよ

？」

「それはオレが特別だからに決まつてるじゃないか」

「オレつてお前、雄か？ 因みに私は女だ」

「何！？ しまつた！ オレとした事が、女の子夢を打ち壊してしまつたぜ！」

「否、女の子は虎が喋らない事に夢を持つてないから。どっちかつ

ーと喋る事に夢を持つてゐからな

「そつか。なら喋つても平氣だな

「待て。そんな事したら確實に女の子は氣絶だし、その上見世物にされるだ

「じやあどうすれば良いんだよ？ そのままじやオレ、女の子の夢

打ち壊す事になつちまうよ

「否、喋らなくて良いから。そもそも虎が喋るなんて有り得ない事だろ」

「言われてみればそうだ。それよりお前、可愛いな。是非オレの嫁になつてくれ」

「恐ろしいから却下だ」

「そんな事言わずになつてくれよ。オレ、飼い虎だから女が居なくて困つてんだよ」

タマがそう言つて心を押し倒す。

「あー、解つた解つた。なつてやるよ」

「本当か！？」

「ああ。だから退けな

「ひやつほ～！」

タマは退くと大喜びで去つていつた。

「ふう」

と安堵の溜め息を吐く心。

（怖かった……）

（この先、一体どうなる？）

「白皇に転校したい
自宅に帰るなり、心はいきなりヒナギクに言つた。
「はあ？」

ヒナギクは訳が解らず疑問符を浮かべた。

「実はな、パパが昔働いてたつて言う屋敷で執事のバイトをやる事になつたんだ。そんでそのバイトの条件が白皇に通う事なんだ」「へえ。つて、何よその条件？」

「知るか。そんな事より推薦書貰つてきた」

心はヒナギクに推薦書を渡した。
マリアからの推薦となつていて。
これを白皇に出せば良いらしい。
「解つた。後で出して来るわ」

「ああ。所で晩ご飯」

「自分で作つて。私もう寝る」
ヒナギクはそう言つて推薦書を仕舞うとベッドに潜り込んだ。
心は台所に入り、適当に晩ご飯を作つて食べ、風呂を済ませパジャマを着て布団を敷いて潜り込み、就寝した。

翌朝、心が潮見に向かつていると、昨日の十字路で正太郎に出会い
つた。

「おはよう御座います、綾崎さん」
「誰だお前？」
「えつ！？ 僕ですよ、東宮 正太郎ですよ」
「知つてるから。私が奴隸の名を忘れる訳無からつ
「一寸待て！ 僕は奴隸じゃなくて彼氏でしょ！？」
「そんなのどっちでも良い」

「綾崎さん、虜めつ子？」

「虜めつ子、言つた。それと心と呼べ」

「心さん、ですか？」

「ああ」

「解りました。今度からそう呼びます。その代わり、心さんも僕の事は正太郎って呼んで下さい」

「しょ……しょ……」

言えなかつた。

それはそうだ。好きでもない男をそつ呼べる筈が無い。

「やつぱ東富と呼ばせてくれ」

「駄目ですよ。僕たち付き合つてんだから名前で呼び合はないと」

「無理だ」

即答した。

「第一好きでもない男を名前で呼べるか？」

「え、僕に氣があるから挑戦受けたんじゃないの？」

「な、何を言つ。私はただお前を奴隸にしたから挑戦を受けただけだ。そりやまあ、少しほは格好良いとか思つたけど、好きつて言つ感情は芽生えていない」

心は頬を赤らめるとそう言つた。

「やつぱあるんですね？」

ガスンシ！

心の拳が正太郎の頬に埋_ズまる。

「何するんですかいきなり！？」

「インフルエンザウイルスが居たから潰してやつたんだ

「もや もんですか！？」

「五月蠅いぞお前。殺されてえのか？」

「すみません」

正太郎は頭を下げると口を開じた。

そして学校に着くまで、一言も喋らなかつたと言つ。

昼休みを迎える、心は食堂で正太郎と飯を食っていた。

「東宮。お前に言つときたい事があるんだ」

「何ですか？」

「私、白皇に転校するかも知れない」

「え？」

「実は今、執事のバイトをやつてるんだ。で、そのバイトの条件が白皇に通つてる事なんだ。だから白皇に転校するんだ。そうなるとお前とも逢えなくなるな」

「でしたら僕も行きますよ」

「マジ?」

「ええ。スポ薦で手続きすれば簡単ですから。これでもし心さんが白皇に転校しても、逢えなくなる事は無くなる訳です」

説明しよう。スポ薦とは、スポーツ推薦の事である。

心は正太郎をマジマジと見詰め、こう言つた。

「ストーカー」

「違うよー。僕たちは交際してんだからストーカーなんて言わないよ!」

それを聞いた心はクスクスと笑つ。

「何が可笑しいんですか!?」

「お前、予想通りの反応するから面白くなつて思つて」

「そうですか」

「ああ。じちそうさま」

心はそう言つて席を立ち、食器を返却口に運んで戻つた。

「お前、私より先に食つてるのに遅いな」

「あなたが早いんですよー。食事が5分つてどんだけですか!?」

しかしその問いは黙殺された。

「これ貰うな」

心は正太郎の皿に載つていた海老フライを摘んで口に運んだ。

「あ、それ僕の大好物なのに!」

「お前がいつまでも残しどくからだ」「僕は好物は最後に食べるんですよ。」

「先に食えよ」

「楽しみが無くなります」

心は辺りを見回して席を立つた。

「何処行くんですか?」

「何処でも良いだろ」

心はそう言つて他の食事中の人たちの下へ行き、海老フライが載つてゐる皿を見付けると、そこから海老フライを奪取した。

「あつ、それ俺の!」

「ああ!?」

心は睨んだ。

「ど、どうぞ貰つて下さい。その方が海老フライさんも幸せです」

「サンキュウ」

礼を言つと心は海老フライを持つて正太郎の下に戻つた。

「詫びだ。貰つとけ」

「え、でもこれ、あの人のがじゃ?」

「くれたんだから良いんだよ」

「僕には無理矢理盗んできた様にも見えますが

「悪い?」

「駄目ですよそんな事!?」

「私は可愛いから何しても許されるんだ」

「そう言つ問題じゃないでしょ!?「兎に角返ってきて下さい。」

「何だ。折角お前の為に盗つてきてやつたのに食わないのか?」

「盗んだものなんか食えません。返してきて下さい」

「解つたよ」

心は盗んだ海老フライを返して行き、謝罪して戻つてきた。

「これで良いんだろ?」

「はい。けど嬉しかつたです」

「海老フライか?」

「はい。盗るのいけませんが、人の役に立とつと言つのはとても良いことだと思います」

「そうだな」

「心さん、回りが言う程悪い人には見えないです」

「そうか?」

「はい。とても優しいです」

「……有り難う」

心は席を立つて去つていった。

放課後、心は剣道部の部室に来ていた。
理由は剣道部の部員だからである。

「綾崎さん、相手お願ひします」

部員の一人が誘いに来た。しかし心は追い返す。

「お前じや相手にならない」と。

「じゃあ僕とやりましょうよ」

次に誘つてきたのは、正太郎だつた。
正太郎は剣道部の部長をやつている。

「手加減しろよ」

「了解」

二人は胴着を着け、中央に立つた。

「そつちから来て下さい」

心は駆け、竹刀を振るつた。しかし、一瞬で弾かれ、面を取られ
る。

「やめた」

心は胴着を脱ぎ捨て元の場所に戻つた。

「心さん、どうしたんですか?」

「やる気失せたんだよ」

「そうですか」

と正太郎は去つていぐ。

(帰るか)

心は更衣室に行き、着替えて帰り支度をし、部室を跡にした。

自宅に着くと、ヒナギクが「御出度つー」と言った。

「何がだよ?」

「合格したのよ、白皇にー」

「マジか!?

「マジよ。これで明日から白皇ね。制服は私のがあるからそれ着るのよ」

バタツ!

心は嬉しさのあまり、氣絶してしまった。

「わっ、心!?

ヒナギクは慌てて心を抱き、ベッドへ運んだ。
そして心は翌朝日を覚ました。

第05話・白皇学院

練馬区に広大な敷地を持つ進学校。名を白皇学院。白皇学院は小中高一貫で都内でも有数な学校である。そんな学校の前に、心は居た。

(此処がある有名な白皇学院)

「よし！」

心は気を引き締めると校門を潜つた。

すると何処からともなく「ヒナえもーん！」と水色の髪の女性が走つて来て心に抱き付いた。が、直ぐに距離を取る。

「つて、ヒナじゃない！ お前誰だ！？ さては侵入者だな！」

女性はそう決めつけると、いきなり心に襲い掛かる。しかし、心にひらりと身をかわされ、女性は地面に顔面から突っ込んだ。

「何なんだてめえは！？」

心は女性を睨みながら言つた。

「その前に貴様から名乗つて貰おうか！…

(何なんだこの人？)

「えいっ、名を名乗れ！」

と女性が間合いを詰めた。

心は仕方なく名乗る。

「今日、転校してきた綾崎 心です。宜しくお願ひしまーす」

心は棒読みで言つて律儀にも頭を下げた。

「綾崎？ 何処かで聞いた事あるような……。まあ良いか。私はこの学校の教師、薰かおる 雪路よ」

「あ、そ」

心は雪路を無視して校舎に向かつた。

その途中、木の上で立ち往生してる男を発見した。

「お前そんな所で何やつてんの？」

心は気になり、近付いて訊ねた。

「何もしてねえよ！ 別に高いのが怖くて降りられねえとかそんな
んじゃねえからな！」

（うわ、何でツンデレ振りなんだ）

「成る程。平たく言うと高所恐怖症つて奴？」

「平たく言うな！ 兎に角、飛び下りるから受け止めてくれ！」

「えつ、一寸待て！」

しかし男は無視して飛び下りた。

「ゴスッ！」

心は顔面で男を受け止めた。

「てめつ、人の顔面に着地する奴があるか！？」

「受け止めろつて言つただろ！」

「つーか、何で怖いのに登つたんだ？」

「ああ。それはあれや」

男は木の枝に乗つた鳥の巣を指差した。

「あそこから雛鳥のチャーゾ子が落ちたから助けてやつたんだ」と、その時、カラスがやつて来て雛鳥に襲い掛かる。

「おい、お前！ チャーゾ子を虐めんじやねえ！」

と男はカラスに向かつて地面に在つた石を拾つて投げた。しかし、カラスがその石を羽で跳ね返した。

「コツン！」

跳ね返つた石が心の頭に当たつた。

心は額に青筋を立て、先程の石をカラス目掛けて蹴飛ばした。

石は物凄いスピードでカラスの目前を通過し、カラスをビビらせ
る。

「今のはスピードで当たたら即死か？」

するとカラスは慌てて逃げて行つた。

「お前、チャーゾ子を救つてくれて有り難うな。俺、薰かある 雪ノ介だ。
宜しく」

雪ノ介は心に握手を求めた。

「良いいって事よ」

心は雪ノ介の手を握った。握手成立。

「私は綾崎 心だ」

「聞かない名前だな。ひょっとして転校生？」

「今日からなんだ。よく判つたな」

「母さんから聞いてたんだ」

「母さん？」

雪ノ介は校門の前で佇んでいる雪路を指差した。

「あれお袋さんなの！？」

「あんなのが母さんで困つてると。それより職員室行くんだろ？」

案内してやるよ

そう言つて雪ノ介は心を職員室に案内した。

「失礼します」

と入室する一人。

雪ノ介はプラモが一つ飾られた席に座る教師の下に移動して言つ。

「父さん、転校生連れてきた」

雪ノ介は手招きをして心を呼んだ。

「伯父さん？」

「そう言つ君は心ひやんか？」

「そうですけど」

「大きくなつたな。義妹いもうとにそつくりだ」

「人が久しぶりの再会に漫つていると、雪ノ介が言つた。

「父さん、知り合い？」

「何言つてんだお前。小さい頃に逢つた事あるだろ。従姉の心ひやんだ」

「マジ？」

「お前、あん時の泣き虫か。何処かで見たことある顔だなあつて思つてたんだけど、やつぱりつか」

「暴力女！」

雪ノ介はそう言つて放つて逃げ去つとしたが、心に頃を掴まれてしまつた。

「それは聞き捨てならんな」

「ごめんなさい！ 撤回するから放して！」

心は雪ノ介を放した。

「うわっ！」

雪ノ介は勢いあまつて前に倒れた。

「いきなり放すなよ！？」

「放せつて言ったのそっちじやん」

「まあそうだけど。それより、母さんだぞ。担任」

「だよな？」と京ノ介に顔を向ける雪ノ介。

「可哀想に。雪路に金をたかられないよつ氣を付けてくれ

その言葉に心は言葉を失う。

まあそんな訳で、心の新しい学校生活は始まった。

第06話・束の間の団欒（前書き）

ファン必読。伊澄が出来ます。

学校が無事終わり、心は屋敷へ行くついでにレンタルビーチオ店に立ち寄った。

「いらっしゃい」

とレジの前に座った店員が言つ。

「つてお前、校則違反じゃねえか！」

店員は驚いて目を丸くした。

「何か問題あるか？」

「大ありだよ！ それ白皇の制服だろ？ てか、お前何処か見た事あるような顔だな」

店員はそう言つて心の顔をマジマジと見詰める。

「お前、ひょつとして、借金執事の子どもか？」

「借金執事？」

「綾崎 風だよ」

「おっちゃん、パパの知り合い？」

「おっちゃんじやねえ！ 橋財閥の三千院 「パンシヨナル
さんぜんいん 亘ワタルだ！」

「橋なのに何故姓が三千院なんだ？」

「それは結婚したからだ」

「ひょつとしてナギど？」

「よく知ってるな」

「三千院って言つたらナギしか思い付かん。しかもバイト先だ」

「バイト？ お前、メイドかなんかやってんのか？」

「否、執事だ。それより、ナギの使いでDVDを借りにきたんだが

「つたく、またかよ。で、何を借りるんだ？」

「これだ」

心は懐からメモを取り出してワタルに見せた。

「ああ、これか。あいつも好きだなあ」

そう言いながらワタルはDVDを取りに行き、直ぐに戻ってきた。

「ほらよ」

ワタルが心にDVDを渡す。

「料金は返却時に払ってくれりや良いから」

「ああ。じゃあな」

心はそう言つと、DVDを鞄に仕舞つて店を出た。すると学校帰りの正太郎と出合つた。

「心ちゃん？」

「東畠か。私は今日から白黒だぞ」

「もう転校したんですか？」

「ああ。そう言つ訳だからお前とはもう逢えないな」

「では明日手続きして、来週には」

「ストーカー」

「違うよ…」

「あ、そ。じゃあな」

心はそう言つて去つていった。

32

三千院家に到着すると、心は門を抜けて屋敷を目指した。所が途中で迷子になり、森の中へ入つてしまつた。

(此処は何処だ?)

と辺りを見回す心。

(つーか何で森があんだよ!?)

とその時、何処からとも無く「あーああー…」と言つ声が聞こえた。

心は、気のせいだ、と自分に言い聞かせ、森を進む。

「あーああー!」

再び聞こえた。しかもそれは、どんどん大きくなつている。

「あーああー!」

その時、心の真横を何かが猛スピードで駆け抜ける……否、人が蔓に掴まつて通過した。

そいつは心に氣付くと、蔓を放して田の前に着地した。

「お前、迷子か？」

そう訊ねるのは、たつた今日の前に降りてきた13歳くらいの金髪ボニー・テールの少女だ。

「誰お前？」

心はそう口にして疑問符を浮かべた。

少女は心の問い合わせに答える。

「私は三千院 さんぜんいん 奈瑠。お前は誰だ？」

「執事だ」

「それは名詞だ。私はお前の姓名を訊いているのだ」

「綾崎 心。三千院家で執事のアルバイトをやつてる」

「そうか。で、迷子なのか？」

「ああ、迷子だ。つーかお前、三千院つて言つたな。と云つては、此處の敷地には詳しいのか？」

「ああ、少しばな」

「屋敷まで案内してくれないか？」

「土下座でお願いしますつて言つたら案内してやる」

「……」

心は言葉を失う。

「どうした。出来ないのか？」

(1)、この私が、年下に土下座だと！？ そんな事出来る訳が無い

！ 此処は年上の私が偉いと言つ事を証明してやれねば！)

心は奈瑠に近付き、頭を小突いた。

「いたつ！ 何をする！？」

奈瑠は涙を浮かべながらそう言つた。

「こんなのが痛いのか。弱虫だな」

「弱虫言つな！」

奈瑠は心の腹に飛び蹴りを放つた。

「うつ！」

心は激痛に呻き声を上げ、腹を押さえて蹲つた。

「てめ……子どもが生めなくなつたらどうしてくれるんだ……？」
と顔を引き攣らせて言つ心。

「そんなの私の知つた事か。それより屋敷に案内して欲しかつたら
土下座しろ」

（くつ、するしかないのか……。仕方ない。此処は素直に土下座し
て、屋敷に着いた瞬間ボコす…）

心はそう決めると、徐に土下座をした。

「屋敷に案内して下さい！」

「良いだろ。付いて来い」

奈瑠はそう言つて屋敷に向かつて歩き出した。

心は立ち上がり、その後を追う。

そして森を抜け、屋敷に着くと、奈瑠が「着いたぞ」と言つた。
「おう、有り難う、な！」

心がそう言つて奈瑠の頬をぶん殴りうとすると、猫が慌ててやつ
て来て心の顔に飛び付き、爪を立てて引っ搔いた。

「ぎやあああああ…」

顔中を傷だらけにされた心は叫び声を上げてその場に倒れた。

「助かつたぞ、白野威」

奈瑠はそう言つて猫の頭を撫でてやつた。

それと同時に騒ぎを聞きつけたメイドのマリアが屋敷内から姿を
現し、心の無惨な姿を確認した。

「奈瑠、これは一体何があつたのかしら」

「あ、聴いてくれマリア！　この女が私を殴りうとしたのを、白野
威が助けてくれたんだ！」

「はあ」

マリアは奈瑠を見るとさう返事して心に向き直つた。

「心さん、大丈夫ですか？」

「ああ、何とか」

「全く。駄目ですよ、直ぐに暴力振っちゃ」

「このクソ生意気なガキが私に土下座をさせたんだ！　屈辱的な事

「この上無かつたんだぞ！？」

心は起き上がり様に奈瑠を指差してそう言った。

「執事ならそれぐらい我慢しなさい。それより傷の手当でしますから、私の部屋に来て下さい。」

「否、結構だ」

「でもそのままでは黴菌が入つてしまつので、せめて消毒だけでも必要無い」

「そうですか。何が遭つても知りませんよ？」

マリアはそう言つと、屋敷の中へ入つて行つた。

それと同時に心が立ち上がり、後を追つように屋敷内に入る。

「よう、心

と一足歩行したタマが現れて声を掛けってきた。

「うわっ、虎が一足歩行すんな！ 驚くだろー？」

と驚き飛び退く心。

「別に良いだる。一人だけなんだから。てかその顔どうしたんだ？」

「ああ、これが？ これは先刻、外で白野威とか言つ猫に引っ搔かれたんだ」

「何！？ オレの心せやんに傷を付けるとは……。白野威め、許してはおけん！」

タマが炎に包まれた。

「お前燃えてるよ！」

「安心しろ。ただの幻覚だ」

そう言つと、タマを包んでいた炎が消えた。

「何だ、幻覚か。て言つかお前、怖いからもう来んな

すると突然、タマが跳んで心を押し倒し、上に乗り掛かった。

「殴るぞ？」

「やつてみろ」

心はタマにグーで殴り掛かる。が、既の所でそれは留まる。

「殴れない。私には殴れない」

「ふつ。それでは執事は勤まらんな」

「何とも言え。あ、そつだ」「どうした？」

「先刻、森の中で雌虎を見たぞ」

「何!?」「うしてはおれん!」

タマはそう言つと慌てて屋敷を出ていった。

心は「ふう」と安堵の溜め息を吐いた。

（助かった。けどじうしょう。嘘を吐いてしまった。屹度、後で大変な目に遭うだろうな）

そう思つと、心は「はあ」と溜め息を吐いた。

その瞬間、タマが再び現れた。

「てめえ騙したな!?」

「うわあつ!」

心は慌てて立ち上がり、階段を上つて上に移動した。するとタマが追い掛けてきて心を壁まで追い詰める。

「よせタマ!」

「嫌だね!」

「ごめんよタマ! 嘘吐いた事は謝る! だからよせ!」

「反省してるなら俺の子を生め」

「それは却下! 私は人間だ! 人間は人間の子しか生まないんだ!」

「そりが。なら無理にでも」

タマがそう言い掛けた刹那、小刀形の手裏剣が飛来して壁に突き刺さつた。

「誰だ!?」

タマが後ろを振り返ると、シャンデリアに水色の髪をした二十歳くらいの青年がぶら下がっていた。

「タマ、僕の娘に変な事したら許さないからな」

「なつ、貴様は借金執事! 死んだと聞かされたが生きてたのか!?

「否、死んだよ。死んだけど、訳ありで降りて来たんだ」

「訳あり？」

「別にお前が知る必要無いだろ」

「けつ、やうかよ」

タマはそう言つと去つていった。

青年はシャンテリアから手を放して床に着地し、階段を上つて心の下に来て手裏剣を取ると言つた。

「怪我は無いかい？」

すると心は青年に抱き付いて泣き出しちゃつた。

「よしよし、もう大丈夫だぞ」

青年はそう言つと、手裏剣を仕舞つて心を抱き締めた。

「それはそうと、大きくなつたな。ママにそつくりだ」

もうお分かりであります。この青年は言つまでもなく、綾崎 風である。

何故に現世に居るのかと言つと、今日は3月3日。ヒナギクの誕生日であり、彼女を祝う為に降りてきたのだ。

「さてと。それじゃあパパは家に居るから、仕事頑張るんだぞ」

ハヤテはそう言つと心を解放し、踵を返して階段を降り、屋敷を出ていった。

午後7時。

執事のバイトを終えた心は、自宅へと帰宅した。

「ただいま」

そう言つと、こつもよつテンションの高いヒナギクが「おかえり」と笑顔で出迎えた。

「テンション高えな。何かあつたのか？」

「何つて、久しぶりにパパが帰つてきたのよ。こんなに嬉しいことは他には無いわよ」

そう言つてヒナギクはリビングへと入つていく。

心は靴を脱ぎ、リビングへと移動した。

「おかえり」

ハヤテが心に笑顔で言つ。

「ただいま。そしておかえり、パパ」

「ただいま。執事の仕事どうだった？」

「一寸聞いてよパパ」

心がそう言つてハヤテの横に座り、屋敷で遭つた事を話さうとすると、ヒナギクが割り込んできた。

「心、その顔の傷は何？」

「気付くの遅いよ！ つて、そんな突つ込みは無視して、これは屋敷で白野威とか言つ猫に引っ搔かれて出来た傷だ」

「そう。じゃあ手当してしないとね」

ヒナギクはそう言つと救急箱を用意し、マキ ンと書かれた消毒液を取り出した。

「良いよそんなの」

「駄目よ、ちゃんとしなくちゃ」

心は立ち上がりつつ後方へゆっくり下がり始めた。

「ハヤテくん、心の事捕まえててくれる？」

「解りました」

ハヤテはそう言つて一瞬で心の背後に回り羽交い締めにした。

「ちょっと、放して！」

「心、傷はちゃんと消毒しなきゃ駄目じゃないか。何で嫌がるんだ？」

「私は悪い子だ！」

心はそう言つとヒナギクが持つていたマキ ンを蹴り上げた。が、

直ぐにヒナギクが反対の手で掴む。

「じつ、じのままでは拙い！ 何か策は無いか！？」

心はそのままでは拙い！ 何か策は無いか！？

ハヤテはそのままでは拙い！ 何か策は無いか！？

とその時、心は後方へ引っ張られて倒れ、ハヤテに両足を固定された。

「ちょっと、卑怯じゃないかこれーー?」

「あなたが暴れるからよ」

ヒナギクはそう言つてチリガミを取り、マキンを心の傷に垂らす。

「ぎゃああああー!」

心は激痛に叫んで涙した。

ヒナギクはそんな心を見て肩を竦める。

「この娘、いつもこうなのよ? 何とかならないかしらね」

「丸で高所恐怖症のヒナギクさんみたいですね」

「いつまでも高所恐怖症じやないわよ」

「克服したんですか?」

「したわ。心が生まれて直ぐ」

「そうですか。つて、逃げられた!」

ハヤテとヒナギクは部屋の隅っこを見た。
すると心がそこで小さくなっていた。

「子どもですね」

二人はそんな心を見ながらクスクスと笑った。

「あそこまで嫌がると、少し異常ですよね」

とそこに現れたのは和服姿の女性、鶯ノ宮

わきのみや

伊澄。

「ハヤテ様、お迎え上りました」

「え、もうそんな時間ですか?」

その間に伊澄は時計を指差した。

時刻は午後8時を回っている。

「あ、本当だ。ではヒナギクさん、僕はこれで逝きます」

ハヤテはそう言つて立ち上がる。

「もう逝っちゃうの? 未だケーキ食べてないのに」

「それは後でお墓に持ってきて下さい」

「解った。次はいつ来るのかしら?」

「元気でね」

「判りません。今、あの世で神様の執事やつてるんですよ。それが忙しくてなかなか休みが取れないんですよ」

「あなた死んでも執事続けてんの？」

「はい、それが僕の生き甲斐ですから」

「もう死んでるでしょ？」

「そうでしたね。それじゃあ

ハヤテはそう言つてヒナギクの唇に自分のそれを重ねると、伊澄と共に去つていった。

第07話・シンテレな男（前書き）

雪が落ちる第7話。

「助けてくれなんて頼んでねえぞ！ by ·雪ノ介」

第07話・シンデレな男

有名進学校、白皇学院。

心はそこの時計塔を眺めていた。

「気になるか？」

そう訊ねたのは薰かおる雪ノ介だつた。

「お、弱虫じゃないか」

「弱虫言つな！で、気になるか？」

「ああ」

「これの頂上にはな、生徒会室があるんだ」

「ふーん」

「そこ」のバルコニーから見える景色も「最高でしょ。上つてみるか？」
(注：雪ノ介は高所恐怖症です)

「ああ」

「じゃあ行こうか」

雪ノ介はそう言つてエレベーターの前に移動し、ボタンを押してドアを開けた。

「雪、良いのか？入つて」

心は入り口に貼られた、く許可無き者の立ち入りを禁ずるくと書かれた紙を指差した。

「俺が許可する。俺、生徒会長だから」

「ふーん」

心は可哀想な者を見る目で見詰めた。

「何だよその顔？」

「別に？ そんな事より、早いとこ上り下りが」

心はそう言つて、雪ノ介と共にエレベーターに乗り込んだ。

最上階に着き、生徒会室に入る一人。

心はバルコニーに出て絶景を眺めた。

「雪、良い眺めだぞ」

「俺は良い」

「何だ、見ないのか？」

心は振り向き様に訊ねた。

雪ノ介は「見てるよ？」と目を瞑り答えた。

「目瞑つてたら見えないじゃないか

「心の目で見てるんだ」

「怖いのか？」

その問いに雪ノ介は目を開けた。

「こ、怖い訳無えだろ！」

そう言つてバルコニーに出て来て絶景を眺める雪ノ介。

彼は絶景に恐怖を覚え、足が竦みだした。

そしてついに耐えきれなくなり「怖い！」と涙目で心に抱き付いた。

心は「よしよし」と抱き締めてやつた。

そこへ、三人の女生徒が現れた。

「ほほ」

「おやおや？」

「何やつてるの？」

その三つの声に驚いた心と雪ノ介は慌てて離れた。

「薰くん、その娘誰？」

と一人の少女が訊ねた。

「俺の従姉」

「綾崎 心だ。心と呼んでくれ」

「趣味は弱い者虐めだ」

「そうそう。弱い子を見るとつい蹴り飛ばしたくなるんだよね。って、誰の趣味が弱い者虐めだ！？」

心はそう乗り突つ込みをして助走無しドロップキックを雪ノ介にお見舞いした。

攻撃を食らつた雪ノ介は吹っ飛んでバルコニーから転落を開始。

「やべつ！」

心は慌てて駆け寄り、雪ノ介の足を掴み・・・損ねた。

「うわあああああ！」

雪ノ介は悲鳴を上げながら、真っ逆さまに落ちていった。

「雪！」

心は咄嗟に飛び降り、雪ノ介に追い付き、彼をお姫様抱っこする
と、体勢を立て直して着地した。

「てめえ、殺す気かよ！？」

「んな気無えよ。それに、殺意があつたら助けねえ」

「本当かよ？」

「私は嘘は吐かない」

「あ、そ。て言つか降ろせよ？」

雪ノ介は頬を赤らめそう言つた。

心はそれに従い、彼を降ろした。

雪ノ介は心から顔を逸らして「……とつな」と言つた。

「え？」

よく聞こえなかつた心は首を傾げた。

「雪、今何て？」

「な、何でも無えよ！ じゃあな！」

雪ノ介はそう言つて走り去つていつた。
(何怒つてんだ、あいつ?)

第07話・シンテlena男（後書き）

第5話の薰 京ノ助を薰 京ノ介に修正しました。同時に雪ノ助も
雪ノ介に変更。

第08話・転校生（前書き）

ストーカー少年が転校して来る第8話。

「心さん、同じクラスですね。b y・正太郎」

3月14日、ホワイトデー。

この日は、チョコをくれたお返しに男が女にクッキーを渡す日である。

しかし、心にとっては一番嫌いな日でもあった。

それは、好きな男が居らず、チョコを上げた事が無い為、クッキーを貰えないからである。

そんな心が学校に登校すると、机の上にクッキーが一つ置いてあつた。

「何故?」

心は思わずそう口にすると、机に置いてあつたクッキーを取った。それには、手紙がくっついていた。

手紙には『僕と付き合つて下さい』と書いてある。

差出人は同じクラスの貴嶋きじま公。

容姿は、薄緑の短髪に青の瞳。見た目、とてもイケメン。心はその少年の下に赴いた。

「あの、これなんだけど」

「うん?」

公が心の方を向く。

心はクッキーに付属していた手紙を公に見せた。

「私なんかで良いの?」

「じゃなきゃ渡さないよ」

心は暫し考え込むと口を開いた。

「お前が本気なのは解った。その気持ち、受け取るよ

心はそう言つと、席に戻つてクッキーを食べた。

直後、薫雪路が入つて来て教卓に立つた。

「HR始めます。だがその前に転校生を紹介しよう」

雪路がそう言つと、教室はざわめき始めた。

「皆静かに！」

雪路がバンッと机を叩いて生徒を黙らす。

「転校生、入るのよ」

そう言つと、転校生が入つて來た。

そいつは東宮 正太郎。心を剣道で負かして無理矢理彼女にした男である。

（げつ、マジで来やがつたあいつー）

心は徐に机の下に隠れた。

すると雪路が「何やつてんだ綾崎？」と訊ねる。

「ちつ」

心は舌打ちをすると、仕方なく椅子に座つた。

「心さん！？」

と正太郎が驚いて目をぱちぱちさせた。

「あれ、二人とも知り合いなの？」

雪路が不思議そうな顔で訊ねた。

「僕の彼かの」

正太郎がそう言い掛けた所で心が「嘘です」と搔き消す様に言つた。

「何だか知らないけど、取り敢えず自己紹介してくれる？」

と雪路が正太郎の名前を黒板に白いチョークで縦に書き込む。

正太郎はそれが終わると、自己紹介を始めた。

「潮見高校から転校して來た東宮 正太郎です。趣味は」

正太郎がそう言つた所で心が「女に虜げられる事だ」と透かさず言つた。

すると生徒が、

「マジで？」

「キモイ」

などと口々に言つた。

「一寸待て！ 今のは心さんの嘘だから皆勘違いしないで！」

「はあ？ 何言つてんだお前。私に殴られて喜んでたじゃないか」

心が言い返すと、正太郎は肩を竦めて「はあ」と溜め息を吐いた。

「心さん、僕を慮めて楽しいですか？」

「楽しい」

「うわっ、うだ！」

「悪いか？」

心はそう問い合わせた。

「悪くないです……」

「人が楽しく会話をしていると、雪路が口を開いた。

「あのさ、二人とも？ H.R.始められないから、そろそろ終わりにしてくれる？」

「ああ。すまん、伯母さん^{おやお}」

「お、オバサン？」

と雪路が目を丸くする。

「そう言つ意味じゃねえよ！ 伯父伯母の伯母だ！」

「わ、解つてるつてそのぐらー」

（絶対解つてねえ、此奴……）

心はそう思った。

「そんじゃあ、東富くん。席に着いてくれる？」

雪路が言つと、正太郎は空席を探し、心の隣に見付けてそこに座つた。

「はあ」

肩を竦めて溜め息を吐く心。

「お前、何で私の隣に来る訳？」

「良いじやん。恋人同士なんだから」

「御免なさい。私の彼氏、今あの人だから」

心はそう言つて公を指差した。

「どう言つ事ですか、それ？」

「どう言つ事だ」

心は正太郎に例の手紙を見せた。

「何で返事したんです？」

「オッケー、と」

「どうして？」

「イケメンだから。そう言つて、お前はもつ、私の彼氏じゃないんだ。それと、お前の座つてる席は・・・」

心がそう言い掛けた所で、後ろのドアが開いて三千院 奈瑠が「おはよう御座います」と入つて來た。

「つて、貴様！ 何故に私の席に座つてるー？」

奈瑠はそう言つて正太郎を睨み付けた。

「そいつの席だから退いてやれ」

心は正太郎をドンと突き飛ばして椅子から落としてやつた。

「いてつ！ いきなり何するんですか！？」

正太郎が立ち上がり叫ぶ。

「退け、邪魔だ」

奈瑠はそう言つて正太郎を突き飛ばして席に座り鞄を置いた。

「おはよう御座います、お嬢様」

心は執事フェイスに切り替え、奈瑠にそう挨拶して会釈した。

「ふんっ！」

奈瑠はソッポを向いた。

（あれ、嫌われてる？）

「お嬢様」

「…………」

シカトされてしまった。

「あの、お嬢様？」

「…………」

反応無し。

「無視しないで頂けますか？」

「五月蠅い！ 話し掛けるな！」

奈瑠は振り向き様に怒鳴り、心を睨み付けた。

それに腹を立てた心は奈瑠に殴り掛かつた。

すると白野威が現れ、心の顔を鋭く尖つた爪で引っ搔いて去つて

いつた。

「いつてー！」

心は叫び、机に伏した。

「やまあ見る、この暴力女め」

奈瑠はそう罵ると前を向いた。

（クソッ、いつか絶対殴つてやる）

心はそう心に誓つのであつた。

第09話・和服少女（前書き）

和服少女が出る第9話。

「妹をお願いします。b y・伊澄」

第09話・和服少女

白皇学院には、旧校舎に入つてはいけないと叫う校則がある。しかし人間、禁止されているとつい行動を起こしたくなるものである。

そんな衝動に駆られた者 紫綾崎 心が一人、旧校舎の前に立つていた。

目の前に聳え立つ校舎からは、紫色の禍々しいオーラが放たれていた。

心はそれに引き寄せられる様に歩き出し、扉に手を掛けた。

「一寸待て！」

とそこには現れたのは生徒会長の薰 雪ノ介。

「そこにに入るな！」

雪ノ介がそう叫ぶと、心は振り向き様に訊ねた。

「どうしてだ？」

「校則で禁止されてるからだよ」

雪ノ介はそう言つて生徒手帳を取り出し、校則が書かれたページを心に見せた。

そこには確かに旧校舎には立ち入らないよ^うこ^うじましょ^ううと書かれている。

「それがどうした？」

心はそう言つて扉を開けて中に入つて閉めた。

「おい、入るなよ！」

と外から雪ノ介の叫び声。

「何が出ても知らねえからな！」

雪ノ介はそう言つて去つていった。

「何が出るつて、何が出る つ！？」

その時、心の目の前に人形の黒い影が現れた。

「な、何だお前！？」

心の叫ぶようなその問いに黒い影は振り向き問い返した。

「貴様、私が見えるのか？」

「見えなきや驚かねえよ！ つーかお前、ひょっとして幽靈か？」

「ふつ、よく解ったな。褒美に貴様の体を頂いてやうつ」

そう言つて黒い影が心の体に入ろうとするが、しかし、心は咄嗟に避けて正宗を召喚し、黒い影を切り裂いた。

すると黒い影は「うわあああああ…」と悲鳴を上げて消滅した。

「つたぐ、何なんだこの校舎は？」

とその時、扉が開いて和服姿の少女が現れた。

身長は奈瑠と同じくらいである。

「あの、今すぐ此処から出て行つて下さい」

と和服少女。

心は振り向き様に「どうして？」と訊ねる。

「それは、悪靈や妖怪などの危険なモノが居るからです」

「それってひょつとしてこんな奴？」

心はそう言つて先程倒した黒い影のイメージを頭上に出現させた。

「そうです。視たんですね？」

「ああ、視た。てかお前、誰？」

そう訊ねると和服少女が顔を顰める。

「人に名前を訊く前に先ずは自分から名乗つて下さいませんか、綾崎 心さん？」

「ああ、そうだつたな……って、何で名乗つてもいねえのに私の姓名が判るんだよ！？」

「その木刀が教えてくれました」

和服少女はそう言つて正宗を指差した。

「お前、此奴と話せるのか？」

「ええ」

「そうか。で、お前の名は？」

「あ、申し遅れました。私は、鷺ノ宮 夏澄です」

和服少女、鷺ノ宮 夏澄はそう言つて「宜しくお願ひします」と

頭を下げる。

それに釣られて心も「いらっしゃる所を宜しくお願ひします」と頭を下げた。

「所で、綾崎さんはこんな所で何をなさつていてるんですか?」

と夏澄が頭を上げて訊ねる。

「校則に入るなどあつたから入つてみたくなつて、それで入つた」

「不良生徒?」

「かもな。てかお前こそ何しに来たんだ?」

「私はお仕事で来ました。あなたは先程、黒い影を視た、と仰いました。では、この校舎から禍々しいオーラが放たれてるのも視たと

思います」

「ああ、確かにそんなの出てたな。けどそれがどうした?」

「この校舎、危険なんです。普通の人が入つたら、命は無いでしょ

う」

「ふうん。それはそつと、鶯ノ宮つて言つたよな?」

「言いましたけど?」

「て事は、伊澄さんの知り合い?」

「妹です。お姉ちゃんを『存知なんですか?』

と首を傾げる夏澄。

「ああ、知つてゐる。偶に家に遊びに来る。それはそつと、伊澄さんに妹が居たのか。お前、お姉さんにそつくりで可愛いな。女の私でさえ心を奪われそうだ」

心はそう言つて頬を赤らめた。

「つて、何を言つてるんだ私は!?」

と動搖して拳動不審に陥る心。

それを見ていた夏澄がクスクスと笑う。

「綾崎さんつて面白い方ですね」

「笑うな!」

「すみません。それより、先刻の黒い影はどうしたんですか?」

「ああ、そいつなら正宗^{こうじゆう}で切り裂いた」

「お強いんですか？」

「まあそれなりに」

「そうですか。では貴方にお願いします。私を手伝つて下さー！」

夏澄はそう言つて土下座をした。

第09話・和服少女（後書き）

サーバ負荷により同じものが一つアップされた。

だからその内の一つを削除しようとしたら、一つとも消えてしまった。

そこで急遽書き直しですよ。

ああっ、もう最悪ーってな訳で次回に続きます。

第10話・心、召喚される（前書き）

異世界へ飛躍する第10話。

「お袋、私は暫く帰れません。b y . 心」

第10話・心、召喚される

夏澄が土下座をしたのに対して心は顔を上げる様に言った。
「解った。そこまで言つなら手伝つてやる」

「本当ですか？」

と夏澄が顔を上げて訊ねる。

「ああ。で、何をすれば良い？」

「えつと、取り敢えず音楽室に行きましょう」

夏澄はそう言つと立ち上がりつて歩き出した。その後ろを、心が付いて歩く。

バキッ！

突然、床が割れて心は落下した。

「大丈夫ですか！？」と夏澄が振り向き、穴の下を覗く。

すると直ぐに返事は来た。

「ああ、大丈夫だ。つーか、一階なのに何で落ちるんだよ？ 訳分かんねえよ」

「さあ」

と夏澄は肩を竦めた。

「まあ良いや。取り敢えず上がるそこ退いてくれ」

夏澄は「解りました」と頷いて下がつた。

すると、穴から何かが飛び出してきて天井に当たつて跳ね返り、床に着地した。その正体は心である。

「よし、そんじゃあ音楽室に」

そこまで言つた所で、心は謎の光りに包まれた。

「ちよつ、何だこれ！？」

と彼女が驚いている間に、謎の光りは夏澄の前から消失してしまつた。

気が付くと、心は何処かの広い部屋に居た。

正面からは真空の刃が迫つて来る。

心は咄嗟に正宗を構えると、迫り来る斬撃を弾き飛ばした。

「何処だ、此処？」

と辺りを見回す心。

「あー！」

心は此処が何処であるかと言つ事に気が付くと、さう呟び、「ナギさん
の部屋だ！」しかし何故いきなりこんな所に？」と疑問符を頭に浮
かべた。

「あなた、何者！？」

と声が聞こえた。

「え？」

心は声の方を向いた。その先には、ピンクの長髪に髪留めをした
少女が立っていた。幼い頃のヒナギクだ。

「お袋？」

と心が首を傾げる。

ヒナギクは「は？」と目を丸くした。

「あの、君は一体？」

と後ろから声が聞こえた。振り返ると、そこには父親のハヤテが
居た。

「パパ！」

心はそう叫び、正宗を放してハヤテに抱き付いた。

「え、パパ？」

ハヤテは首を傾げた。

「久しぶりだね、パパ」

「あ、あの、君は誰？」

「えつ、パパ、私の事忘れちゃったの！？ 娘の心だよ！」

「知らないよ。て言うかそもそも僕に娘なんか居ないって
心はその言葉に驚いた。

「何言ってんだよパパ！ パパは綾崎

颯でしょ！？ 私はその綾

崎 颯の娘の心だよ！」

ハヤテは訳が分からず頭が真っ白になつた。

「あの、あなたは一体？」

と傍らに居た夏澄似の少女が心に訊ねる。

「ん？」

心が夏澄似の少女に向ぐ。

「えつと、夏澄？」

「いえ、伊澄です」

「何だ、伊澄さんか。そつくりだから間違え……って、ええ！？」
心は驚いて飛び上がりそうになつた。

「そんじゃあ此処は過去！？」

「否、多分、あなたから見れば異世界かと」

「異世界？」

「はい。あなたの事は、私が異世界から召喚しました
「何か男の子が女の子の使い魔になるアレみたいだな」
「ヤマグチノボルが描いたアレですか？」

とハヤテ。

「そうそう、それそれ！ つーか、話し変わるけど、二人は何で戦
つてんの？」

「ああ、それは 」

とハヤテが心に今ある状況の事を説明した。

「成る程。お袋の体からそいつを追い出せば良いんだな？ 任せと
け」

心はそう言つて自分の胸を叩くと、ヒナギクの方を向いた。

「正宗！」

心はそう叫んで手放した正宗を引き寄せて装備し、ヒナギクの背
後に回り込んだ。

「はっ！」

と野球の打球フォームで正宗でヒナギクの腰を叩き、透過させて
体内の何かを吹つ飛ばした。

同時にヒナギクの体が倒れた。

「ヒナギクさん！」

とハヤテが駆けてくる。

心は彼女をハヤテに任せると、先程吹っ飛ばした何かに近付いた。
その何かは全身がメタルで出来ていた。

「貴様がアンゴル・モアか？」

謎のメタル生命体、アンゴル・モアは「その通りだ」と答えた。
「ノストラダムスの予言は本当だつたか」

と心は正宗を振りかぶり、振り下ろし際に「まあそんな事より、
貴様は私が潰す！」と言つた。

アンゴル・モアは振り下ろされた正宗を全身の硬い体で弾き飛ば
した。

「何つ！？」

心の手から正宗が離れ、宙を舞つて床に突き刺さる。

「この野郎！」

心はアンゴル・モアを殴つた。

ガニッ！ と鈍い金属音が鳴り、同時に心の拳に激痛。
(かてえ此奴！)

「俺の体はヒヒイロノカネと言つ金属物質で出来ている。この金属
はこの地球で一番硬いと言われているダイヤモンドの刃でも傷は付
けられないぞ」

「何？」

「ふんっ」

アンゴル・モアが心の腹に拳を埋すめる。

「がはつ！」

心は吐血し、吹っ飛んで壁にめり込んだ。

(仕方ない。こうなつたら)

心は壁から抜け出すと、気を溜めた。

「はああああああああ！」

金色のオーラを身に纏い、筋肉が膨張する心。

「3分で決める！」

心はそう叫ぶと、一瞬でアンゴル・モアの懷に移動し、顔面を殴り付けた。

アンゴル・モアは勢いよく吹つ飛ぶが、直ぐに体勢を直して心に接近。打ち合いが始まった。

（クソツ、強い！）

心は隙を見て距離を取り、正宗を引き寄せて掴み構えた。

「貴様と格闘しても埒が明かねえ。こいつで終わりにしてやる！」心はそう言うと、傍らに落ちていた曝しの付いた大きな出刃包丁っぽい物を拾つて口に銜え、ヒナギクの下に落ちていた木刀を引き寄せて空いている手で握つた。

（正宗！？）

とその木刀を見て感嘆する心。

（そんな事よりも）

心は出刃包丁っぽいのを口に銜えたまま、

「三刀流、カマイタチスラッシュ！」

と叫んで駆け、三本の刀を振るい、アンゴル・モアの背後へ抜けた。

するとアンゴル・モアの体がバラバラになつて八方に飛び散つた。

「おのれ、よくも殺つてくれたな！」

その声と共に、アンゴル・モアの破片が一点に集まり出して一つになり、元の形に戻つた。

「こうなつたら貴様に乗り移つてやる！」

アンゴル・モアがそう言つて心に飛び掛かると、彼女が言つた。

「お前はもう、死んでいる」

「え？」

とアンゴル・モアが疑問符を浮かべた刹那、アンゴル・モアは爆裂霧散。爆風が発生し、傍らに居たハヤテ、ヒナギク、伊澄は吹き飛ばされて壁にぶつかつた。

「うわっ！」

「キヤツ！」

「痛いです」

と三人は壁からずり落ちて床に倒れた。が、ヒナギクが直ぐに立ち上がり、心に近付いた。

「一寸あなた」

「何だ？」

と銜えていた出刃包丁っぽい物を口から離して振り向く心。「何だ、じゃないわ。危ないじゃない！ 死んだらどうしてくれんのよ！？」

ヒナギクはそう怒鳴りながら睨んだ。

「「めん。あんなに強風だとは思わなくて」

ヒナギクは「はあ」と溜め息を吐いて肩を竦めた。

「まあ良いわ。三人とも無事だから。それはそうと、あなた私にそつくりね

「そつくりなのは当然だよ。だつて私、綾崎 鳩と桂 雛菊の長女だから」

「……え？」

ハヤテとヒナギクは目を点にした。

どう言う事？ と訊ねる二人。

「つまりこう言う事ではないでしょ？」

と伊澄が口を開き、二人が彼女の方を向いた。

「心さんの居た世界では、お二人が心さんの両親なのではないでしょうか？」

「ですよね？」 と顔を心に向ける伊澄。

心は素直に頷いた。

「私とハヤテくんが！？」

ヒナギクはハヤテの顔を見ると顔を真っ赤に染めた。

「……？」

ハヤテはそんなヒナギクを見て頭上に疑問符を浮かべた。

「所で伊澄さん」

「はい、何でしょ?」

「私は元の世界に帰れるの?」

その問いに伊澄はソッポを向いた。方法が無いらしい。

「どうなの?」

「……さあ?」

と肩を竦める伊澄。

「さあ、じゃねえよ! 帰れなきゃ困んだよ!」

「そんな事言われましても、還す方法が判りません。すみませんけど、判るまでこの世界に居てトさい」

「そんなあ……」

心はその場に崩れて膝を床に着いた。

第10話・心、召喚される（後書き）

予告通りリンクさせてしました。
こつちは心視点であつとのとは微妙に違つてますが、内容は一緒です。
では次回

第1-1話・心VSアサシン執事（前書き）

初めて執事バトルをする第1-1話。

「爆乳は動きにくいぜ。b y . 心」

第1-1話・心VSアサシン執事

異世界に召喚されて一週間が経過した。心は今、桂家に居候している。

「お袋、腹減った」

土曜の夜、心はヒナギクのベッドの上から机で勉強しているヒナギクにそう言った。

ヒナギクは勉強を嫌々中断すると、立ち上がって部屋を出していく。その後を心が付け、二人はリビングに移動した。

ヒナギクは心の方を向き「何が食べたい?」と訊ねた。

「ハンバーグ」

「好きなの?」

「大好きだ」

「奇遇ね。私もなのよ」

そう言つてお台所へ入つていくヒナギク。

「遺伝だよ。生まれてきた時にお袋の好物が受け継がれたんだ」

「そう。て言つて、そのお袋つての辞めてくれない?何か老けたみたいで嫌よ」

「じゃあ何て呼べば良いんだ。ママか、ママと呼んで欲しいのか?」

「ヒナギクと呼びなさい」

「それは無理。自分の母親を名前で呼ぶのは抵抗ある」

「じゃあ呼びやすいので」

「オッケー。解つたよ、俎板さん」

その途端、ヒナギクの堪忍袋の緒がブチッと切れた。

ヒナギクは心を睨むと「あんたには言われたくないわよー」と言って彼女の胸元を指差した。

「あんただつて俎板でしょー!?」

「否、私は締めてるだけだ」

そう言つて心は服を脱いで胸元を示した。そこには曝しが巻かれ

ていた。

「外しなさい」

ヒナギクにそう言われ心は外した。

するとボインッと音が鳴つたのと同時に胸が膨らんだ。そのサイズは驚く程に大きい。巨乳、否、爆乳と言つた所か。

それを見たヒナギクは床に膝を着き「負けた……」と酷くやつれた顔で呟いた。

「ねえ、どうしたらそんなに大きくなるのか教えて」

「大きくしたいのか？」

ヒナギクは「うん」と力強く頷いた。

「揉んで貰え」

その言葉に、ヒナギクはある妄想を。

それは、自分がハヤテに胸を揉まれてている所だった。

ヒナギクはカアッと赤くなると慌てて妄想を中断した。

「駄目よ！ 無理よ！ そんなのさせられないわ！」

「誰にやられてたんだよ？」

「は、ハヤテくん……」

「好きなのか？」

「……うん、好き」

「クれば？」

「それは拒否するわ」

「どうして？」

「負けた気がするからよ」

「…………」

「私はね、告白するよりされるのが良いの。それに、ハヤテくんが私の事どう思つてるかなんて判らないし」

「ようし。それじゃあパパの気持を私が確かめてやるわ」「心はいつも言いながら胸元に曝しを巻き服を着た。

「どうやって？」

「お袋に化けてパパと一日デートをする。その間にあの人の気持を

探るのや」

心はやつまつて携帯電話を取り出した。

「所で、番号解る?」

「え? ああ、番号ね」

ヒナギクは携帯を取り出して電話帳からハヤテの携帯番号を呼び出して心に見せた。

心は番号を打ち込むと発信した。

「フルルルルルル」と呼び出し音が鳴り、ハヤテが応答した。

「はい、ハヤテです」

「あ、ハヤテくん。私、ヒナギクだけど」

と声を高くしてヒナギクヴォイスを出す心。

「あのね、明日の日曜日なんだけど、時間あるかしら?」

「空けよつと思えば空けられますか?」

「そう。じゃあ明日のお昼に負け犬公園で待ってるわ

そう言つて心は電話を切つて仕舞つた。

日曜の正午。髪をピンクに染め髪留めを付けた心は負け犬公園でハヤテを待つていた。

「お待たせしました、ヒナギクさん」

とそこにハヤテが現れた。

心はハヤテの方を向き「私も今来た所よ」と答えた。

「それじゃ行きましょうか?」

「はい。所でどちらに行くんですか?」

その問いに心はポケットからチケットを2枚取り出した。舞浜にある遊園地である。

「あの、これつてひょつとして

「デート。少しば喜びなさいよ? 折角の女の子からのお誘いなんだから」

「でしたら辞めておきます」

「は？」

心は何故と言いたげな顔をした。

「お嬢様にバレたら怒られる氣がするので」

「ふうん。ハヤテくんは私と『テー』トするのがそんなに嫌なの？」
そう言つて心は顔を顰めた。

「べ、別にそう言つ意味で言つた訳じゃあ・・・」

「じゃあどう言つ意味？」

と心は聞合いで詰めるが、しかし、ハヤテは答えられなかつた。心はハヤテの胸倉を掴んでグイッと引き寄せた。

「早く本当の事言いなさい。怒らないから」

「ほ、本当に怒りませんか？」

「うん、怒らないわ」

と心は笑顔で言つてみせた。

「では言いますけど、ヒナギクさんつて何があると直ぐ怒るじゃないですか。だから一緒に居るのは嫌なんですよ」

ハヤテがそう言つと、心の拳が顔面にめり込んだ。

「おぶつ！？」

「殴られたい訳？」

「殴つてから言わないで下さい」

「はあ」

心は溜め息を吐きながら肩を竦めた。

「帰る」

そう言つて心は桂家に向かつて歩き出した。

（拙い、ヒナギクさんを怒らせてしまつた。仕方が無い。此処は巧く機嫌を取つて……）

ハヤテはそう思つと、後を追い掛けて肩を掴んだ。

「ヒナギクさん、やつぱり行きます。遊園地」

とその時、二人の足下に手裏剣が飛来。地面に突き刺さつた。

二人は感嘆の表情を浮かべると、手裏剣が飛んで来た方を向いた。

その先には時計があり、その上に忍者の格好をした人物が立つてい

た。

忍者？　と二人は首を傾げた。

何と無く忍者っぽい奴は「私はアサシン執事。綾崎 鳩、貴様の命は貰つた」と言つて飛び降り、着地に失敗して転ぶ。

その時二人はこう思つた。間抜けだなあ、と。

すると自称アサシン執事が立ち上がり叫ぶ。

「お前ら今、間抜けだとか思つただろ！？」

その問いに二人は首を横に振るつた。

「ふんつ、まあ良い。勝負だ、綾崎 鳩！」

自称アサシン執事がそう言うと、そいつの前にく今週の執事バトル！』と言つテロップが現れた。

「一寸待つた！」

心が叫び、テロップを退かして別のテロップを表示させた。くアサシン執事の死に様』と言つテロップだ。

「な、何故私が死なねばならんのだ！？」

「何と無く

「理由も無く表示させんな！」

アサシン執事はそう叫んでテロップを退かした。

「そんじやあ綾崎 鳩！覚悟しやがれ！」

とハヤテに襲い掛かるアサシン執事。だが、心が素早く足払いを掛けてしまつを倒した。

ドテツ！　と腹這いになるアサシン執事。

「貴様、私の邪魔をすると言うのか！？」

アサシン執事は立ち上がり心を睨んだ。

「する」

「そうか。なら先に貴様の命を貰おう！」

アサシン執事は懐から小太刀を取り出して攻撃を開始した。しかし、軽やかに回避され、攻撃は全て空を切る。

「鈍いな、お前」

とその時、小太刀の刃が心の胸元に触れ、服と一緒に曝しが引き

裂かれた。

ボインツと膨らむ爆乳。

心は顔を真っ赤に染めると「てめえよくもー」とアサシン執事に足払いを掛けて直ぐに宙へ蹴り上げ、連續キックを156・804,000回お見舞いして飛び上がり、前転して踵で叩き落とし着地した。

アサシン執事はボロボロになつて氣絶していた。

一方ハヤテは心の爆乳を見て鼻血を垂らしている。

「あ、あの、ヒナギクさんつてボインでしたっけ！？」

「見るなあ！」

心はハヤテの懷に一瞬で駆け、アッパー・カットを繰り出した。

ハヤテは「うわあああああああ！」と悲鳴を上げて遙か彼方へ飛んで行つた。

「あつ！」

と心はその場で固まつた。

ネタが尽きた。そもそも現代にでも戻そつか。それとも・・・。

第1-2話・ヒナギクのお迎え

練馬に広大な敷地を持つエスカレーター小中高一貫式の白皇学院。心は現在、此処に籍を入れて通っている。最初は潮見に籍を置くつもりだったが、ヒナギクがそれをさせなかつた。

そんな心が朝、ヒナギクと一緒に校門に来ると、小学生くらいの黄色いツインテール少女を連れたハヤテと出会つた。

「おはよう御座います、ヒナギクさん」ハヤテが微笑みながらそう挨拶した。

「おはよう、ハヤテくん」とヒナギクも微笑みながら挨拶を交わす。そのついでに「ナギもおはよう」と少女の方を向いて言つ。

「ヒナギク、”も”とは何だ、”も”とは？」人をおまけみたいに言つた

「ゴチン！」

突如、少女の頭に拳骨が飛來した。

「ヒナギクさんだ。年上を呼び捨てすんじゃねえよチビ」

そう言つたのは心である。チビは頭のたんこぶを押さえながら涙を流して彼女を見上げた。

「誰だ貴様！？」

「何故お前に教えにやならんのだ？ つーか人に名を訊く時は先ず自分から名乗るもんだろ。常識だ。そんな事も出来ないのか、お前は？」

少女は心を睨みながら「三千院さんぜんいん 凪だ」と答えた。

「そうか。私はあや」

そう言い掛けた所で、ヒナギクが耳を引っ張つて囁いた。

「（綾崎は拙いわよ。桂にしなさい）」

「（どうじて？）」

「（問答無用。解つた？）」

「ちつ」

心は舌打ちをするとナギの方を見た。

「桂 心だ」

「桂? ヒナギクと同じ姓ではないか」

そこでまたヒナギクが心の耳を引っ張る。

「(双子つて事でお願い)」

「(何で?)」

「(良いから言つ通りにしなさい)」

「(しゃーねーな)」

心はナギに向き直った。

「実は私たち、双子なんだ」

「そうなのか?」

とナギがヒナギクを見る。

「一寸待つて下さい」とハヤテ。

「どうした?」

ナギがハヤテを見る。

「那人、あや

そう言い掛けた所でヒナギクが慌ててハヤテの口を塞いで顔を近付けた。

顔面にはくお願ひ、空氣読んで」と書いてある。

ハヤテは頷くと「な、何でもありません、お嬢様」と言った。

「何だ、おかしな奴だな。それより行くぞ、ハヤテ」

ナギはそう言って校門を潜つて行つた。

「ふう」と安堵の溜め息を吐くヒナギク。

「あの、ヒナギクさん。どうして偽名なんですか?」

「ナギの前で私たちの娘だつて言える?」

ハヤテは少し考えて「無理です」と答えた。

「でしょ? 解つたら私に呑わせて」

「解りました」

「おーい、ハヤテー!」

とナギが校門の向こうで叫んだ。

「それじゃあ先に行つてます」

ハヤテはそう言つと慌てて校門を潜つて行つた。

ヒナギクは心の方を向くと言つた。

「心、あなたはこれから白皇に居る間は娘じゃなくて双子の妹だからね

「妹？」

「妹じや不満かしら？」

「不満……かな」

「あなた、誕生日いつよ？」

「11月11日」

「歳は？」

「16。次の誕生日で17」

ヒナギクはドーンと音を立てて四つん這いになつた。

「敗けたわ

「何が？」

「歳よ。私は3月3日生まれ。どう見てもあなたのが先よ」

「はいはい。けど、生まれた年は違う。お袋は平成元年、私は平成22年」

「だからお袋は辞めてつて言つてるでしょ？」

「俎板

「殴るわよ？」

「殴れるもんならな

心がそう言つと、ヒナギクが立ち上がり拳を放つたが、しかし、攻撃は既の所でかわされ空を切つた。

「遊んでないで行くぞ」と心は校門を潜る。

「ちよつ、待ちなさいよー」と後を追い掛けるヒナギク。「嫌なこつた」と走り出す心だが……。

「ズザー！」

何者かに足払いを掛けられ躓いて転び地面を滑つた。

「おつと悪い。つい足が滑つちまつたぜ」

「何すんだてめえ！？」

心は立ち上がり様に声の主に振り向いた。その先には正太郎に似た少年が立っていた。

「正太郎？」と疑問符を浮かべる心。

「僕は東宮あづみや」康太郎だ。正太郎なんて知らないな。つーかお前誰だ？桂さんみたいな格好しやがつて

その言葉にヒナギクが答える。

「私の双子の姉よ」

康太郎は振り向き「あ、桂さん。え、双子？」と二人を交互に見る。二人はほぼ同時に頷いてみせた。

「桂さんって双子だつたの？」

と疑問の表情を浮かべる康太郎に一人は再度頷く。

康太郎は心に近付くと、申し訳なさそうな顔で「先刻は「ゴメン」と言った。

「ゴメンで済むかつづーの」

心はそう言って手の平を見せた。血だらけになっていた。

「あら、怪我したの？ それじゃあ手当しないとね」

ヒナギクはそう言って懐からマキンを取り出した。

心はそれを見ると恐怖で鳥肌を立てた。

「い、良い……」

「何言つてんのよ。ちゃんと消毒しないと黴菌入るわよ」「だから良じって言つてるだろ」

心はそう言つて去るのとするが、咄嗟にヒナギクに腕を掴まれてしまった。

「何で逃げるのよ？」

「放して！」

心はヒナギクの腕を振り払つて駆け出した。

「待ちなさい！」と後を追うヒナギク。

「うわっ、来んなよ！」

「そつはいかないわよ…」

「誰か私を助けてーー！」

心は涙田になりながらそう叫んだ。

するとじこからともなく、と言つた茂みからクラウスが現れヒナギクの前に立ちはだかつた。

「まあ待ちたまえ」

クラウスさん と立ち止まるヒナギク。

「つて、何か以前より老けてない？」

「む……それは気のせいだ」

それよりも とクラウスは心の方を向いた。その先では彼女が呆気に取られて佇んでいる。

「何で……どうしてクラウスさんが居んの？」

「それは迎えに来たからに決まっているだろつ。お母さんも一緒だ」クラウスがそう言つと、背後でヒナギクが倒れた。

「お袋ーー？」

心は慌てて駆け寄つた。

「しつかりしる、お袋ーー」としゃがんで仰向けにして抱き起しす。するとヒナギクは薄田を開けた。

「迎えに来たわよ、心

「は？」

心は田を点にした。

「迎えに来たつて言つたのよ。全く、親に心配掛けさせいや駄目じやない」

「あの、言つてる事がよく……」

「あ、そうだつたわね。説明するわ。実はね

とヒナギクは話しを始めた。

それは、心が元居た世界での出来事である。

彼女が消えた後、夏澄がその場で靈視をし、空間に異世界へ通じる穴を見付けた。その後、夏澄は綾崎家を探してそこに向かい、白皇の旧校舎で遭つた事をヒナギクに伝えた。ヒナギクは心のバイト

先である三千院家にその事を連絡し、クラウスと共にこちらの世界にやつて来たのだ。最初は、クラウスでは無く、マリアと行く予定だつたが、クラウスが『私が行く』と駄々をこねた為、結局マリアが残る事になったのだ。

「 と言つ訳なのよ」

「 へえ。けど何でその体なの?」

「 それは精神だけこっちに来たから。同じ人物が一人も居ちゃややこしいでしょ?」

「 確かに」

「 だから夏澄ちゃんに頼んで精神だけを送つて貰つたのよ。そしたらこっちの世界に居る私の体に入っちゃつたって訳。まあそう言う訳だから、これから旧校舎に行くわよ」

「 旧校舎? どうして」

「 元の世界に帰る道がそこに在るからよ」

「 マジで? それじゃあ早く行こう!」

心はヒナギクを放すとすく立ち上がり、旧校舎に向かつた。

第1-3話・お兄ちやんとの再会

旧校舎の一角に、異次元へのゲートがある。一人はそこにはやつてくると、立ち止まつた。

「なあ、これつて……」

心が漆黒に染まる丸い穴を指差した。

「そう、これが元の世界に通じる穴よ。じゃあ、私は先に戻つてゐね」

ヒナギクはそう言つと、肉体を脱ぎ捨てて穴に飛び込んだ。

「ぐつと唾を飲み込み、徐に手を近付ける心。

「お待ち下さい つ！」

その声と共に現れたのは、アサシン執事だった。

「なつ、お前は！」

心は正宗を掴み、構えた。

「待つて下さい。貴方と戦つつもりはありません」

その言葉に心は正宗を仕舞つ。

「どう言つ事だ？」

アサシン執事は跪いて答える。

「私もお供します」

疑問符を浮かべる心。

「実はですね、貴方の強さに惚れてしまいまして、それで舍弟にでもなるうかと思いまして」

「舍弟か。別に構わないが」

「では、お供をせてくれると?」

「ああ

「有り難う御座ります！ 所で、お名前を伺つて宜しいでしょうか

？」

「綾崎 心だ」

心はそう残して穴に飛び込んだ。

「お待ちを！」

アサシン執事も後に続いた。

元の世界では、ヒナギクが穴をジッと見つめていた。

「夏澄ちゃん、心が出て来るまでどのくらいかしら？」

「判りません。このゲートは本来、靈体が通る道ですから、生身の人間が通るどどのぐらい掛かるのか……」

と、その時、穴の中から心とアサシン執事が飛び出して来た。

「ゴンッ！」

心とヒナギクは頭を「じつん」としてしまった。

「「痛つ！」」

同時に頭を押さえる一人。

「危ないじゃない！ いきなり飛び出して来ないで！」

ヒナギクは目に涙を浮かべながら怒鳴った。

「仕方が無かつたんだよ。穴に飛び込んだら後ろから道が崩れ始めるから慌てて此処まで走つて来たんだ」

「そして私の頭に突つ込んだ、と」

所で とアサシン執事を見るヒナギク。

「こいつか？ こいつは私の舍弟だ」

心はアサシン執事を指差しながら答えた。

「舍弟って、貴方また暴力振るつて言うなりに？」

「違うよ。此奴はアサシン執事と言って、あっちの世界のパパを狙つてたんだけど、私が軽く叩いてやつたんだ。そしたら、私の舍弟になりたいと」

「そう。それより、貴方に逢いたいって人が居るんだけど」

そう言つてヒナギクは、葉書を取り出して心に渡す。それにはこう書かれている。

綾崎 心さん、その節は助けて頂き、感謝致します。今度、お礼を致しますので、私のお家までは非遊びにいらして下さい。

「…………？」

心は疑問符を浮かべながら首を傾げた。

（何かお礼されるような事したか？）

心は過去の記憶を呼び起こした。

*

1年前の事だ。当時、心は潮見高校の1年生だった。

その日の夜、心は暇潰しに町中を徘徊していた。

（何か面白い事無いかな）

そう思つていると、偶々通り掛かった空き地の片隅で三十路前後の女性が、人間では無い何者かに襲われているのが見えた。

何者かは逃げ場を失つて脅える女性に言つた。

「お前の体を寄せせ」

「何なんですか、貴方？」

やばい！ そう思つた心は、咄嗟に駆け出し、何者かに飛び蹴りを放つた。

「うつ！」

何者かは呻くと共に吹つ飛んで塀にぶつかってズルズルと地面に落ちた。

「くつ……何者だ？」

何者かは立ち上がり、心を見て訊ねた。

「下がつてろ」

心は女性を自分の背後に移動させた。

「貴様、宇宙人か？」

「邪魔するな！ 僕はそいつの体を頂くのだ！」

何者かはそう叫ぶと、心に気弾を放つた。

心は攻撃を喰らい、後ろに吹つ飛びそうになつたが、何とか堪え

た。

「ほう、俺の技を喰らつても立つては対した奴だ」

「何者だ、お前」

「俺か？ 俺はチヨンジャー星から来たギーユラス様だ」「チヨンジャー星人？」

知らないな と首を傾げる心。

「そうか。て言うかそこを退け」

「それは却下。何が目的かは知らないが、この女性には指一本触れさせねえ」

「そうか、邪魔をするのか。ならば貴様を殺してからにしようか」「何者か、ギーユラスはそう言つと、心に接近して先制攻撃。だが、心はヒヨイと避けてカウンターをお見舞い。

「がはつ…」

ギーユラスは腹を押さえ蹲うずくまつた。

「つ……強いな貴様。後ろの奴より遙かに高い戦闘力だ」「鍛えてるからな」

心が答えると、ギーユラスが何かを企んでいるかの様な笑みを浮かべた。

「…………」

警戒する心。

「気に入つたぞ、その体 つ！」

「…………？」

心が疑問符を浮かべると同時に、ギーユラスが両手を横に広げた。そして、

「チヨンジ ツ！」

その叫び声と共に、ギーユラスは妙な色の細い光線を口から放つ。(やべ、動けねえ)

それは単純に、後ろに女性が居るから避けられない、と言つ訳ではない。丸で金縛りに遭つたかの様に体が動かないのだ。(くそつ、動け！)

焦る心。その間にも、妙な色の細い光線は迫る。

(んっ！？)

光線を喰らつたと同時に、体内に何かが入り込んだ。そして強い力によつて体外へと押し出された心の魂は向かい側のギニコラスの体に重なる。

「ちよつ、何だよこれ！？」

驚き戸惑うギニコラス。

心はクククと笑い、

「交換させて貰つたぞ、貴様の体と つ！」

「なつ！？」

信じられない事だつた。人間の体が他の奴と入れ代わるのは。

「どうやら驚いている様だな」

「私の体を返せ」

「断る。返して欲しければお前のより強い体の持ち主を連れて来い」

「はあ……」

ギニコラスはその言葉に溜め息を吐いて言つた。

「それはお前の体じゃないか」

「どう言つ事だ？」

と心は怪訝そうな顔をする。

「それは…… こう言つ事だ つ！」

ギニコラスはそう言つと、田にも留まらぬ速度で心の背後に移動し、回し蹴りを放つた。しかし、相手は吹つ飛ばず、平気な顔をしていた。

「ふつ、耐久性も優れているな」

心はそう言つてニヤリと笑うと、振り返つてギニコラスの鳩尾に拳を埋ずめた。

「がはつ！」

吐血するギニコラス。

「凄い威力だ。軽く突いただけで怯むとは」

心はそう口にすると、ギニコラスの鳩尾から拳を抜いた。

（くつ……自分にやられるなんて、情けねえ……）

「さて、そろそろ殺してや」

心がそこまで言い掛けた所で、何処からともなく一足の下駄が飛来し、ゴスツと額に直撃した。

「誰だ！？」と、心は下駄が飛んで来た方を見た。それに釣られ、ギニコラスも振り向く。その先には、心と瓜二つの人物が居た。

「お兄ちゃん！」

ギニコラスはそう叫ぶと、そのお兄ちゃんに駆け寄つて抱き付いた。戸惑うお兄ちゃん。

「逢いたかったよ、お兄ちゃん」

「放せ」

お兄ちゃんはギニコラスの締め付けから脱出した。

「心、それはアイツから体を取り返してからだ」

お兄ちゃんはやつと、心の方へ足を進めた。一步一歩、確實に近付いていく。

「何だ貴様は？」

その問いにお兄ちゃんは答える。

「知る必要は無い。お前は元の体に戻つて死ぬのだからな」「何だと？」

「聴こえなかつたか？　お前は死ぬんだよ」

お兄ちゃんはそう言つと、デコピンで心を吹つ飛ばした。

「うわああああああ　つー」

悲鳴を上げながら土管へと突つ込んで破壊する心。

心は立ち上がり様にニヤリと笑う。

「強い体……気に入つた　つー」

心はそう言つと、「チヨーンジ　つー」と例の光線を放つた。

（しめたー！）

咄嗟の判断で光線に駆けるギニコラス。

光線を受け、ギニコラスの体に何かが入り込み、同時に強い力で心の魂が外に押し出され、元の肉体に重なつた。

「よつしゃあ！ 体が戻ればこいつのもんよー。」

心は叫ぶと、お兄ちゃんと共にギニコラスに飛び蹴りを放った。

「辞めり つ！」

ギニコラスは叫ぶが、しかし、一人の攻撃はもう止まらない。ギニコラスはダブル飛び蹴りを見事に喰らい、爆裂霧散した。

「お兄ちゃん」

心は着地すると直ぐ様お兄ちゃんへダイブが、しかし、お兄ちゃんにひらつとかわされ、地面に突っ込んだ。

「…………」

睨め付ける心。

「悪い。つい反射的に避けてしまった」

お兄ちゃんは申し訳無さそうな顔でそう言った。

「まあまあ、睨むなよ」

しかし、心の表情は変わらぬままだ。

「あー……俺、急用思い出したから帰るわ。母さんこ直しへ伝えておいてくれ。じゃあな」

お兄ちゃんはそう言つと、攻撃用に使つた下駄を履いて去つていった。

「あの…………」

女性が心に声を掛けた。心は「何だ？」と顔を向ける。

「助けて頂いて有り難うですわ。今度、お礼させて頂きたいので連絡先を教えて頂けますこと？」

「いや、お礼なんて要らない。気持で十分だ」

心はそう言つと、立ち上がりつて女性の前から去つていく。

「お待ち下さい！」

立ち止まつ、振り返る心。

「出来れば、お名前だけでも…」

「綾崎 心」

そう名乗り、去つていく。

「私は天王州 てんのうす アテネで御座いますわ！ いつか、必ず貴方にお礼

を「一」

女性は心の小さなその背中に向かって叫んだ。

*

「思い出した

1年前の記憶が脳裏に過った心は、そう呟いた。

「…………？」

ヒナギクはそれに疑問符を浮かべる。

「お袋、私行つてくる

「へ？」

心は去つていった。

「ちょっと待ちなさいよー！」

ヒナギクは叫んだが、しかし、もう聞こえない所に心は居た。

「はあ…………」

ヒナギクは溜め息を吐いて肩を竦めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919d/>

ヒナアフター

2010年10月10日07時12分発行